

目次

ポ[。]ンコツ競走馬の秘密

5

訳者あとがき
254

主要登場人物

- ジョニー・フレッチャー……………書籍セールスマン
サム・クラッグ……………ジョニーの相棒
ジョー・シブリー……………〈シブリー・ステイブル〉代表。ユリシリーズ号の馬主
ウィルバー・ガント……………〈シブリー・ステイブル〉の厩務員
ベン・クリーガー……………シブリーの顧問弁護士で元判事
ウイリー・ピベット……………私設馬券屋
レフティ……………ピベットの子分
アーニー……………ピベットの子分
パット・シー……………騎手
ヘレン・ローサー……………ジョー・シブリーの姪と称する女
エドワード（エド）・ローサー……………ヘレンの父親
アルバート・シブリー……………ジョー・シブリーの弟と称する男
チャールズ・コンガー……………若手弁護士
アーネスト・ウィルコックス……………ソニーと呼ばれる見習い騎手
ピーボディ……………〈四十五丁目ホテル〉の支配人
エディー・ミラー……………〈四十五丁目ホテル〉のボーイ長

ポ
ン
コ
ツ
競
走
馬
の
秘
密

第一章

ジョニー・フレッチャーをごきげんにするのに大した手間はいらぬ。ポケットの中の五ドル札一枚と、とっておきの勝ち馬情報があればじゅうぶんだ。というわけで彼はいま、鼻歌まじりに、オンボロの小型車でジャマイカ競馬場まで向かっている。

ジョニーと比べてサム・クラッグのほうは、背中を丸めて新聞を読みふけている。「ジョニー、あったよ、この記事だ」彼は暗い声で言った。「記事によれば、ワイジンガーって男が、競馬で帳簿の帳尻を合わせようとして、五年の判決を食らったそうだ」

「だけどその男は、競馬場の関係筋からまともな情報をもらえたのか？ ジョー・シブリーの話じゃ、ユリシーズ号なら最初のコーナーに入る前に、他の馬たちを置いてけぼりにしていくってよ」

「それはジョーの勝手な言い分だよ。あいつはあの駄馬の持ち主だぞ、身びいきが過ぎるだけさ。第一、予想屋たちはユリシーズの勝ちなんか、まるで予想してないよ。ピート・フィシエルなんて、ユリシーズがエンパイア競馬場の第四レースで競争中止となったのは、前日も前々日も走ったからだ」

「ジョーが言うには、あのとときのユリシーズは後手を踏んだそうだ」ジョニーが言い返した。「でも、今日のレースだけは、この馬に賭けろって言うんだ。ジョーがおれに間違ったことを教えると思うか」

い？ かつてやつを命を救ったも同然のおれにだぞ」

サムが頭を振った。「オーケー、ジョニー。おれたちには五ドルある。競馬場に入るには二ドル二十セントかかる。それからあの馬に二ドル賭けたら、おれたちに残るのは八十セントだ。それと本の山だ。明日には売つちまおうぜ」

「ああ、もちろんだ……競馬場はもうすぐだぞ。ほら、あの人込みを見ろよ」

「ああ、みんな左に進んでいるな。でも気をつけて運転してくれよ。このオンボロ車じゃ、ぶついたらたひとたまりもないぞ」

「おれが車を壊したことなんてあつたか、サム？」

サムはその問いかけに答えなかつた。が、数分後に答えは出た。ジャマイカ競馬場の外にある、広々とした駐車場に車をいれたときに、それは起こつた。

ポンコツ車の前で、目の覚めるような黄色のクーペがスリップして急停車した。ジョニーにすればブレーキをかける余裕はたっぷりあつたのに、ポンコツ車のブレーキが全然きかなかつた。だから車は、黄色いクーペのリアバンパーに追突——しただけでなく、あつというまに動かなくなつてしまつたのだ。

「何考えてんだよ！」ジョニーはわめいて、ポンコツ車から勢いよく出ていった。クーペのドライバーも飛び出してきた。運転が許される年齢にしろ達していそうな女だが、車を手でできるだけのものはたっぷり持っているのだろう。グシャッとへこんだ左側のリアフェンダーを見る彼女の目が怒りに燃えていた。

「このとんま！ バンパーを叩きつぶしてくれたわね。け、警察を呼んでやる！」

「警察だと？」 ジョニーはあえぎながら言った。「そっちのフェンダーはもともと曲がつてたんだろ。それより、こっちの車を見てくれ！」

「そんなガラクタの寄せ集めが車だなんてよく言うわ。そんなものを運転するなんて、頭がいかれてるんじゃないの。免許証を見せなさいよ」

「そっちこそ見せてみる」

「ほら！」 女はハンドバッグから紙入れを引っ張り出すと、ジョニーの目の前にさっと突きつけた。

「ヘレン・ローサー」 ジョニーが読みあげた。「エルカミーノ・アパートメントか。わかった、修理代の請求書は送っとくよ」

「何言ってるの？ あんたの免許証を見せてよ」

サムが壊れたポンコツ車から降りてきて、ジョニーの耳元でささやいた。「そのくらいにしとけよ、ジョニー。人が集まってきてるぞ」

ジョニーはあたりをぐるりと見回した。出走予定時刻が近づいていて、車は駐車場に続々と入ってきている。だがドライバーたちは車を停めるよりも、目の前の騒動に気を取られている。喧嘩見物が嫌いなやつなどいないうえ、ジョニーと女が声を張りあげ続けていたからだ。

「いいだろう」 ジョニーは女に言った。「このへんでやめとくよ。どっちの責任かなんて、もう言うつもりはないさ。あんたはあんたの車の傷をなんとかしろ、おれはこっちの車をなんとかするから

——

「そうはいかないわ！」 女は憤然として言った。「こっちのフェンダーは、そっちの車一台分よりずっと高いのよ、あんた、わざとぶつかったんじゃないの。さあ、免許証を見せなさいよ。それとも持

つてないの?」

「おれが無免許で車を運転するとも?」

「するかもね。でも、そんなことしてたら、そっちには都合が悪すぎるわね。さあ、免許証を出しなさい。さもないと、警察を呼ぶわよ」

「二台の車のバンパーがからまっちまってるよ、ジョニー」サムが口をはさんだ。「それもしつかりと!」

「うそっ!」女は慌てて前を見た。まじまじと見つめたかと思うと、ジョニーのほうに向き直った。その目は怒りのあまり、いまにも涙があふれそうだ。「なんてこと……警察に!」

「おいおい、お嬢さん」サムが声を張りあげた。「あんたの車はおれが持ち上げてやるよ」

「無理だわ」

「無理だと? まあ、見てなつて」

サムはしばしバンパーをながめたかと思うと、さっと前かがみになって、つぶれたボンコツ車のバンパーをつかんだ。傍目にはなんの苦もなく、彼は車の前方を持ち上げて、一歩分かそこら後ずさりすると、車を置いた。

集まった野次馬から、恐れのようななどよめきが起こった。

ジョニーが突然、得意げにあたりを見回した。「にんげん起重機だ!」彼は思いっきり声を張りあげた。「みんな、あれを見たかい? あれこそ若き怪力サムソン、世界最強の男だ! サム、もう一度やってくれ!」

「はあ?」サムが驚いてうなった。

「もう一度、車を持ち上げてくれと言ったんだ。ここにいるみんなが、たまたま持ち上がったんじゃないかとか、トリックだとか思うかもしれないだろう」と言うと、ジョニーは声をひそめてささやいた。「ボンコツがおし、やかになっちまったんだ、ここでひと儲けしようぜ」

サムがボンコツ車の前に進み出ると、すかさずジョニーが続けた。

「みなさん、彼をご覧あれ。あの車をまるでおもちゃみたいに持ち上げてみせますよ。ほらね！ さあ、今度はおろしてくれ。そうです、みなさん、こんなすごいもの、二度とご覧になれませんよ。世界で最強の男。しかも、若きサムソンが、かつてはたった九十五ポンドしかない虚弱な男だったとは、いったい誰が信じようか！ これは真実なんですよ、みなさん……」

黄色いクーペの持ち主が、突然ジョニーの前に出てきて、歯齧みしていきり立った。「あんた、いったい何をたくらんでんのよ？ 免許証を見せなさいよ、さもないと……」

「頼む、ちよつと待っててくれ！」ジョニーはそう言い、彼女を無視して続けた。「みなさん、すべてはこの小さな本の中にあるんです。いま目の前にいる男が、若きサムソンになった秘密の特訓法がここにすべて書いてある。豊富な図と解説文で、どなたでも——そう、あなたもあなたもあなたも——どうすれば若きサムソン並みに力強くなれるかが、これを読めばすっかりわかります。たった一週間でブルックリンの電話帳を真つ二つに裂けるし、ひと月あれば鉄の棒を折り曲げることだってできるんです……そうです、たった二ドル九十五セントですよ。そちらさんも、力強くなりたいと思いませんか？ もちろん、なれますとも。それからお嬢さん、ボーイフレンドのために一冊いかが。いまはちよつとふくよかになってしまったかもしれないが、この本の内容どおりにしばらく続けてもらえれば——おや、まあ！」

「ジョニー」サムがしゃがれ声で言った。「おまわりだ……」

「はい、あなたもですね！」ジョニーが叫んだ。「お急ぎを！わたしはこの場所を二十五年借りているわけじゃないもんでね。実を言うと、いま契約満了するところなんです。ちよつと、道をあけてもらえますか！」

ピユツ！

ジョニーが駆け出した。ヨンカーズ・チームのラインをインターフェアしながら突破していくノートルダム・チーム（両チームともニューヨーク州内のアメフトチームと思われる）。みために、立ちはだかる見物人たちをかわしながら走り抜けていくサムの後ろにぴたりとついて。二人はそのままチケット売り場まで、一目散に駆け抜けていった。

その売場で、ジョニーは急いで二人分の入場券を買った。ゲートをくぐると、ようやく後ろを振り返り、駐車場のあたりを見回した。まだかなり騒然としているようだ。

彼は頭を振って言った。「あと五分ありやなあ……まあ、それでも五冊は売れた。ありがたいぜ」

「そうだな。でも百冊は置き去りにしちゃったぞ」

「まったくだ。おまけにあのイカした車も失っちゃったしな。おまわりがナンバープレートから持ち主を割り出そうなんて気をおこさないことを祈るぜ。ふうむ、あの娘には二、三ドルばかり送っておくか。フェンダーの修理代として。ヘレン・ローサーが……」

「各馬、いっせいにスタートしました！」拡声器から声がとどろき、二万ばかりの観客が声を囁らす。「スタートしたぞ」ジョニーは声をあげ、慌てたように、興奮する客たちの人垣を押し分けて進んでいった。爪先立ってコースが見える位置までたどりつけた頃には、最後の直線の攻防のまったただなか。

客たちはみな激しく興奮していた。

「ジェリコ！ メアリーモード！ ホーボーケン！……いいぞ！……行けー！……」

「ジェリコが勝った！」

ジョニーが爪先立ちのまま、体を前後に揺らしながら言った。「おつ、掲示板に払い戻しが三十二ドル八十セントと出たぞ。なあ、これっていつまで有効なんだ？」

「あの配当は第一レースのだよ」サムが言った。「ユリシーズは第二レースだ。さあ、おれたちも馬券を買いに行こう」

「そうだった！ で、売り場はどこだ？」

「あそこ、パリミュチュエル式馬券（売上総額から手数料や税金等を差し引いた残金の中した票数で等分して払い戻す方式） 売り場でだよ。だけど、なあ、

ここは無茶しないで、複勝に二ドル賭けるくらいにしとかないか？」

「複勝だといくらつくんだ？」

「六ドル戻るな。儲けは四ドルだ」

「四ドルだって？ おい、おれたちはそんなことのためにここへ来たのか？ なあ、ここに入るのに

二ドル二十セントかかってんだぞ」

サムは、降参だとばかりにため息をついた。「オーケー、まかせるよ。だけど、おれは、ユリシーズはそんなに走らないんじゃないかと思うんだよなあ」

ジョニーは馬券売り場に向かった。大急ぎのあまり、背の低い痩せた男とぶつかってしまい、相手をひっくり返しそうになった。「失礼、ミスター」そう言いかけたところで、声を張りあげた。「ジョー・シブリーじゃないか！ まさにいま、探してたんだぞ！」

「ジョニー・フレッチャー！　なんとなんと！」　小さい男が叫んだ。「会えて本当にうれしいよ。おれと再会せずに競馬場から帰っちゃまわなくてくれ。いま、急いでいてね。ユリシーズがスタートにつくところなんだ」

「なあ、教えてくれ。いまちようど、そのユリシーズに賭けようとしてたんだ。えっと、あんたは彼の勝ちを確信してるんだよね？」

「大金をぶっこめよ、ジョニー。やつは調子がいいし、このレースはやつのためにあるようなもんだぞ」

「よし、ジョー、わかった。買うよ」

ジョニーは馬主と別れて、複勝二ドル用の窓口に向かい、販売人に告げた。「ユリシーズを一枚」

窓口の男が馬券発行機のボタンを押すと、ピンクの馬券がひよいと出て、じれったそうに待つジョニーの手に渡された。

「幸運を」　チケット販売人が愉快そうに言った。「あのボンコツが来たら、けっこうな額がつくね。やつに賭けた馬券を売ったのは、これでたったの二枚目だ」

「なんだって？」　ジョニーは顔をしかめた。「万が一勝ったら、単勝はどれくらいつくと思うかい？」　販売人は肩をすくめた。「総額次第だけど、七十か八十はつくな。ひよっとしたらもつとかも」

ジョニーは息をのんだ。「このレースは何頭出るんだ？」

「たった八頭だ」

「たった八頭？　じゃあ、おれには八分の一のチャンスがあるんだな？」

「まあ、そういう見方もあるかね」

ジョニーは売り場から立ち去りながら、頭を振った。それから急にくりと向きを変えると、単勝五ドルの窓口に向かった。「ユリシーズを三枚だ」彼はきっぱり言うと、すぐに厚紙でできた馬券を受け取った。

ジョニーは競馬場の外で、一冊につき二ドル九十五セントの本を五冊売っていた。もともと手許に五ドルあったが、自分とサムの入場券に二ドル二十セント使った。いまユリシーズに単勝で十五ドル、複勝に二ドルで計十七ドルを賭けた。つまり残ったのは五十五セントだった。

だが、ユリシーズの単勝が百対一なら(アメリカ競馬のオッズは「ドルに
対し何ドルつくかで表示される」)……。ジョニーはそれを考えただけで身震いした。

彼がグランドスタンドでサムと合流した頃、出走馬たちは列をつくって行進中だった。サムは鼻にしわを寄せ、うんざりしたように言った。「あれがあんたの馬だよ、八番だ。よさそうに見えないなあ」

「八番だな？　なあ、おれには優雅に見えるぜ。おれはいつも黒毛が好きだし、彼はかなり大きいじゃないか。まわりにいる、ちっこいやつらとは違うよ」

「あそこにいるあの小さいの、二番のハイアウオサ。おれはこのレースではあの馬が気に入ったな。それから、あの小さな牝馬ひんばのほう、あれはミモイだ。あの馬が二着に来そうだな」

「ひよっとしたら、ひよっとするかもな。だがおれは、ジョー・シブリーに会ったばかりで、あらためて彼から、ユリシーズが負けるはずがないと太鼓判を押してもらったんだ。彼には大金を投じたんだから……ほら！……」ジョニーの目がトラックの反対側にある大型の電光掲示板に釘づけになった。掲示板の光が一瞬点滅して、新たなオッズを示していた。

「八番は」ジョニーが読みあげた。「六十だと。ちえつ、オッズが下がってるじゃないか！ いまはたったの六十対一かよ。百対一になってくれたらなあ」

サムがうなつた。「もう我慢できないや。ジョニー、おれに二ドルくれよ。そしたらハイアウオサに賭けるから。ひよつとしたら払い戻しがあるかもしれないよ」

「おっと、このレースでは、もう賭ける気はないね」

「あんたはもう賭けなくていいよ。おれがこの馬に賭けるんだ。さあ、金をくれ」

「無理だよ、サム。もうないんだ」

「はあ？ 本は五冊売れたんだよな？」

「そうだ。で、ユリシーズにぜんぶ賭けちまった」

サムはショックで頭がくらつとした。「嘘だろ！ だって、あんたは……」

「シブリーがあれだけ自信満々なんだ、ユリシーズで大丈夫だ」

「もう見られないや」サムはうなつた。「レースが終ったら教えてくれ、そしたら家に帰れるな。」

頼むから——」

「スタートしました！」

「ウォーッ！」ジョニーが叫んだ。「ユリシーズを見る。群れから飛び抜けていくぞ。あの走りを見ろよ！」

驚いたものの、まだ信じられないでいるサムが背伸びをした。「あれは二番の馬だよ、ジョニー」彼は嘆くような声で言った。「ハイアウオサだ。八番はしんがりだよ」

ジョニーは、まるで蒸気オルガンみたいに肺から息を吐き出した。ユリシーズは七番手を走る馬か

ら二馬身の遅れ。コーナーでは三馬身半の遅れをとった。

「さあこい、頼む」ジョニーが叫んだ。「追いつけ！」

だが、もたえ苦しむジョニーにとどめをさすかのように、ユリシーズは八馬身差のびりに終わつた。ジョニーは馬券をはずたずたに引き裂くと、猛烈に腹を立てて、ジョー・シブリーを探しにかつた。出走馬が検量室前に戻つた際は取り逃がしたものの、守衛を押しつけ、厩舎が並ぶエリアにまで押しかけた。

「ジョー・シブリーはどこだ？」彼は黒人の厩務員に尋ねた。

厩務員はにやつと笑つた。「シブリーさんは、おかげんがよくないようなんだな。十三番のヘラックキー・ステープル」に行つてみなよ」

「十三番だな、よし！」

サムがあとに続き、ジョニーは十三番と記された厩舎にそつと近づいた。だが、中には入らなかつた。ちょうどジョー・シブリーが出てくるところだ。彼には連れがいた。駐車でジョニーのポンコツ車がぶつかつてしまつた、あの車の女だつた。

彼女はジョニーのことにすぐに気づいて、目をかつと見開いた。「あんた！ こんなところにいたとは！ また会えてうれしいわ。警官はどこ？」

ジョニーは片手をあげて言つた。「お嬢さん、おれはもうたつぷり罰を受けたんだ。ユリシーズに有り金賭けちまつたからね」

「すまない、ジョニー」ジョー・シブリーが割り込んだ。「きみにあやまりたかつたんだ。今夜わが家に来てくれ。ダイナーをごちそうする。話しておきたい大事な用件もあるんだ。無駄足は踏ませな

いよ」

その口調には、さつきまでジョニーが抱えていた馬主に向けた怒りの気持ちをどこか抑えこんでしまふものがあつた。彼はうなずいた。

「オーケー、ジョー。必ず行くよ」

「そしてわたしも行くわ——警官を連れてね」ヘレン・ローサーがぴしゃりと言った。

ジョニーは彼女に歯を見せて笑つた。すぐさまシブリーに抜け目ない視線を送つたが、相手は彼女を紹介する気がないらしい。ジョニーは肩をすくめ、サムの腕に触れて帰ろうと促した。

話を聞かれないところまでくると、サムが言つた。「ジョーのやつ、なんだかへんだつたな。あんな深刻そうな顔は見たことがないよ。しかも、あの女と知り合ひとはね」

「ああ。ひよつとしたら親類か。もつとも、親類がいるなんてジョーから聞いたことがない。まあ、今夜、行けばわかるな」

「どうやって？ ジョーの家は、ロングアイランドのはずれにあるんだ。おれたち、街中まで戻る金もなければ、あんな郊外に出る金なんでもつとないぞ。おまけに、おれが歩くつもりでいるなんて思つたなら、あんたはおめでたすぎるぜ」

第二章

ジョー・シブリーの屋敷まで行くのに、えんえんと歩き続ける必要はなかった。少なくとも途中までは、歩かずに済んだ。ジョニー・フレッチャーが、競馬場の外で入念に聞きまわったおかげで、彼とサムはそれぞれ十セントあればフラッシュングまで行けるとわかった。そこで、ノーザン・ブルーバードを走るバスに乗りかえ、マンハセットの近くで降りた。その時点でジョニーのポケットには、十五セントが残った。

マンハセットからジョー・シブリーの家までは、たった二・五マイルほどだった。曲がりくねった道路をそれたところにある四エーカーの敷地に、母屋おもやや厩舎が木々に隠れて点在していた。

道路脇に車が六台停まっていた。ジョニーはナンバープレートを確認した。「おまわりが来てるぞ」「あの女だ」サムが声をあげた。「先回りしやがったな」

屋敷の門前に州警察の巡査が立っていた。「誰かをお訪ねで？」警官が尋ねた。

「ジョー・シブリーだよ」ジョニーは答えた。

「彼の友人かね？」

「そうだ……なんで訊く？ 何かあったのか？」

「わたしからは言えないね」

ジョニーは警察車両を指さし、じれったそうに言った。「ハイウェイパトロールがござってデイナーに呼ばれたわけじゃないだろ?……:ジョニーに何があつたんだ?」

警官は口元をゆがめて言った。「中に入って、巡査部長から話をきくといい」

サムが警戒信号を送り続けたが、ジョニーはそれを無視した。「行くぞ」そう言って、門を通り抜け、私道を歩き出した。砂利が敷き詰めてある私道は、カリフォルニアにでもありそうな平屋建ての母屋をぐるっと取り巻いて、裏手にある白くて細長い建物へ続いている。母屋のベランダに警官が一名、母屋の裏手と車庫と厩舎を兼ねた白い建物の前にも、警官が数名立っていた。

「巡査部長」ジョニーとサムを案内した州警察官が叫んだ。「この者たちは、シブリーの友人だそうです」

がっしりした体格で、軍人みたいな髭をはやした警官が振り向き、ジョニーとサムに鋭い視線を投げた。「今夜こちらに来たのは、たまたまかね?」

「いや」ジョニーが言った。「ジョーに招かれたんだ。何があつた?」

「シブリーは死んだよ」警官がぶっきらぼうに言った。「事故だ」そう言って、厩舎のほうに頭を傾げた。

ジョニーは静かに息を吸った。「どんな事故だ?」

「馬に殺された」

「ユリシーズに?」

「名前は知らんが、その馬が殺したのは確かだ。シブリーは体中の骨を折られていた、そんなところだ」

サムがぎよつとして叫んだ。「なんて死に方だ！」

細くてしなびた顔の男が、厩舎から出てきた。「そうじゃねえ。ユリシーズが殺したりするもんか。ましてボスを」

「ウイルバー」ジョニーが叫んだ。

その小柄な男が安堵の声をあげた。「ミスター・フレッチャー！ ありがてえ。あんた、来てくれたんだね。ボスはあるたのことがつか気にしてたんだ。ボスが言ってたよ、『今朝だけは……』」彼が急に言葉を切ったので、州警察を指揮する巡査部長はその先を促した。

「なんと言ってたんだ、ガンツ？」

ウイルバー・ガンツは顔をしかめた。「さあて。ボスとミスター・フレッチャーは友だちだった。ミスター・シブリーは、ミスター・フレッチャーを信用してた、そりゃあもう、ほかの誰よりもだ。ただし、判事は別だけだよ」

「判事とは？」

「判事のクリーガーって呼ばれてる。ボスの弁護士だよ」

巡査部長の目から熱心が消えうせた。「ベン・クリーガーがシブリーの弁護士だと？ ううむ。ルーク、クリーガーに電話だ。すぐこちらに駆けつけられるか、訊いてみてくれ。彼はグレートネツクの奥に住んでいる」

ジョニーはウイルバー・ガンツににじり寄った。「今日ユリシーズに乗ったのはおまえさんか？」と、声を落として尋ねた。

「おれが？ 違うよ、乗ったのはパット・シード。薄汚い、ならず者だぜ」

「つまり、パットがユリシーズをうまく乗りこなせなかったってことだな？」

ガンツが意地悪そうに、唾をぺっと吐いた。「ユリシーズは、あのレースなら大差をつけて勝てたはずだぜ。ボスがあんたに話したかったのは、そのことなんだ。きっとウイリー・ピペットがシーに……」

巡査部長がいきなり、フレッチャーとガンツのほうに体を向けた。「聞こえたぞ。ウイリー・ピペットが、この件とどうかかわっているんだ？」

「ウイリー・ピペットって誰だい？」 ジョニーが無邪気に尋ねた。

「あんたらがいま、話題にしていたやつのことだ」

「おれは言っていない」 ジョニーが言った。「おれは、ここじゃあよそ者だ」

巡査部長がいらだたしげに手を振りまわした。「おい、ガンツ、おまえ、ピペットグのことを話していたな」

「おれが？ いんや、おれがミスター・フレッチャーに話したのは、ユリシーズに賭けた馬券チケットを持っているって話だ。ピペットグじゃなくて、チケットグ、な？」

「ああ、そうだ！」 ジョニーが言った。「今日はユリシーズが勝つ、とジョーがこっそり教えてくれたもんだから、おれは彼に賭けた馬券チケットを買ったのさ」

「で、勝ったのか？」

「知らないのか？」

「競馬はやらのだ」

「おれたちも、やらなきやよかったな」 サムがためらいがちに言ってみた。

訳者あとがき

アメリカの作家フランク・ブルーバー（一九〇四～六九）による、〈ジョニー・フレッチャー&サム・クラッグ〉シリーズ六作目をお届けします。

本のセールスを生業とするジョニーとサムの二人が主人公の本シリーズでは、ジョニーが自ら書いた怪しげな肉体改造本を口八丁手八丁で売り込み、サムがその本を実践した「体験者」と称して見事な体格と怪力を披露します。二人は毎度さまざまなゴタゴタや事件に巻き込まれ、ときに犯人扱いされたり、逃走を続けたり、留置場にぶち込まれたり、あるいは真犯人探しに勝手に乗り出したりしながらも、知恵と勇気と、とびきりのユーモア精神を発揮して、波乱万丈の日々を乗り越えていくというのが物語のお約束です。

今回のトラブルは、ニューヨーク州にある競馬場から始まります。ジョニーとサムは、ひよんなこととで親しくなった競走馬の持ち主（馬主）に誘われて、競馬で一発あてようとオンボロ車で競馬場へ繰り出します。場内に入る前から、車の接触事故で若い女性とひと悶着を起こし、警察を呼ぶ呼びな이의騒動に巻き込まれます。でも、そこは転んでもタダでは起きないジョニー、その場を強引に切り抜けたばかりか、ちゃっかり本まで売って軍資金を増やします。でも人間、欲を出せばロクな目にあ

わないのが世の常。有り金をすってオケラになったばかりか……さらなる災難が、この凸凹コンビに振りかかってくるのです。

本作には、当時のアメリカ競馬界の一端が映し出されています。作品発表（一九四二年）以前のアメリカ競馬界といえば、十九世紀末から二十世紀初めにかけて競馬禁止法により競馬が衰退したものの、私設馬券屋を排除したことで、パリミューチュエル方式（日本の競馬も同じ方式。十三ページの訳注参照）による馬券が発売されるようになり、再び盛り上がります。二度の世界大戦中も、アメリカでは競馬が盛んに行われていたのです。

当時と現代とはアメリカ競馬もシステム等の違いはあるでしょうが、勝ち負けに一喜一憂する客たちの姿や、手塩にかけた馬たちを勝たせたいという馬主や調教師たちの思いや、ギャンブルという性質上、悪だくみを練る者の存在など、今も昔も物語が生まれる要素には事欠きません。

本作に登場するジャマイカ競馬場は、ニューヨーク州ロングアイランドの西端に位置するクイーンズ地区に実在した競馬場です。一九〇三年に開場し、一九五九年に閉場されるまでの五十六年間、ニューヨークカーたちが気軽に出かけることができた娯楽場として親しまれていました（ちなみに閉場後の敷地帯はその後、広大な住宅地として整備開発されました）。

ところで、シリーズ第一作『フランス鍵の秘密』（早川書房）では、ジョニーがかつて本の売り上げで年に七万五千ドル以上を稼ぎ競走馬まで持っていた……と話すくだりがあるほど、彼が競馬にいい込んだ過去が語られています。であれば、競馬界のことは多少は詳しいはずなのですが、なぜか本作中のジョニーは、そんな過去をすっかり忘れてしまったかのように、馬券の買い方やオッズの見方

〔著者〕

フランク・グルーバー

別名チャールズ・K・ポストン、ジョン・K・ヴェダー、ステイヴン・エイカー。1904年、アメリカ、ミネソタ州生まれ。作家になることを志して勉学に勤しみ、包み紙などに短編小説を書き綴っていた。16歳で陸軍へ入隊するが1年で除隊し、編集者を経て作家となる。初の長編作品“Peace Marshal” (39)は大ベストセラーになった。1942年からハリウッドに居を移し、映画の脚本も執筆している。1969年死去。

〔訳者〕

富田ひろみ（とみた・ひろみ）

翻訳者、ライター。埼玉大学教養学部卒。訳書にエドモンド・クリスピン『列車に御用心』、ジョン・ダニエル『傭兵の告白 フランス・プロラグビーの実態』（いずれも論創社）、キャンデイス・フォックス『楽園 シドニー州都警察殺人捜査課』（東京創元社）など。

ボンコツ^{きょうそうば}競走馬^{ひみつ}の秘密

——論創海外ミステリ 247

2020年2月20日 初版第1刷印刷

2020年2月29日 初版第1刷発行

著者 フランク・グルーバー

訳者 富田ひろみ

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1890-0
落丁・乱丁本はお取り替えいたします